

「胃外科」

胃外科研究会 編

責任編集

新潟大学学長

武藤 輝一

東京慈恵会医科大学教授・第2外科

青木 照明

大阪医科大学教授・一般・消化器外科

岡島 邦雄

慶應義塾大学教授・外科

北島 政樹

横浜市立大学助教授・救命救急センター長

杉山 貢

熊本大学教授・外科

小 川 道 雄

私の駆け出し時代には、幽門側胃切除術は切除と再建を伴う major 手術のうち、若い医師が最初に執刀させてもらう手術であった。現在とは違って、執刀の機会はなかなか頂けなかった。鉤を引きながら、いつかこの手術を、と思っていた。手術の1つ1つの操作を暗記していた。それで全操作を言えるようになっていた。

頭の中では完全に胃切除術を行えるまでになっていたのだが、最初の胃切除術では頭に血が昇り、ただ前立ちの先生の指示どおりに、何が何だかわからないうちに手術を終わっていた。今もそれだけは覚えているが、手術所見も満足に書けないくらいだった。

確かに最近胃切除術は減少している。しかし現在でもなお、幽門側胃切除術は若い医師にとって登龍門であり、ここを通過して初めて大きな手術の習得が始まると言ってよいだろう。

最近、胃外科研究会の編集による「胃外科」が上梓された。「序」で武藤輝一先生が述べておられるごとく、まさに「胃の外科に関するすべてを

網羅した」成書である。胃の外科の歴史から始まり、胃の構造・機能、診断法、周術期管理と術後障害、各種胃・十二指腸疾患の手術適応、手術手技、手術成績、補助療法はもとより、最近関心の高い胃の内視鏡的手術も詳細に記されている。更に胃外科をめぐる最近のトピックスとして、胃電図、胃癌における遺伝子異常、*Helicobacter pylori*, interventional therapy, 肥満患者の胃手術に至るまで収載されている。

内容は極めて詳細であり、記述は平易で、図や写真を駆使し、噛んで含めるような記載がなされている。しかもトピックスでは最近の文献まで含まれている。編集の方々の目がすみずみまで行き届いていることがよくわかる。

本書ではまた、切除胃標本の取り扱い方も懇切に述べられている。標本の開き方、リンパ節の採取、写真撮影、固定法、計測と略図の作製、コピー、切り出し(マーキングの仕方まで)などである。更に胃癌手術と quality of life, 癌告知、の項もある。これらの項目は、われわれの時代は口伝え、伝承によって学んで

きた、重要であるにもかかわらず無視されていた項目である。本書をひもとくと、胃外科の何人ものエキスパートから、それぞれの担当項目を直接手を取って懇切に指導を受けているように感じる。

本書の刊行の目的の第1に、若い外科医が初めて胃・十二指腸の手術の術者や助手を務める前に、知っておかねばならない事項の掲載が挙げられている。それが見事に達成されているのが本書である。若い外科医は各頁が真っ黒く汚れるまで繰り返し読み返し、胃外科すべてをマスターすべきである。同時に専門医、指導医を目指す医師にとっては、専門医試験に合格するために現時点で必要な項目をすべて学ぶことができるという点でも、本書は極めて有用と言える。

このような成書をまとめられた編者の諸先生に感謝し、必読の書として消化器外科医、一般外科医に本書をお勧めするものである。

● B5 頁 408 図 302 写真 28
カラー写真 97 表 80 1997
定価(本体 22,000 円 + 税) 円 400

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)